

Title	社内起業家の成功要因に関する一考察 - 技術者のキャリア発達の視点から -
Sub Title	
Author	岡安, 尚昭(Okayasu, Naoaki) 渡辺, 直登
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2003
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2003年度経営学 第1847号 不可
Genre	Thesis or Dissertation
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002003-1847">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002003-1847</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 論文要旨

所属ゼミ	渡辺 研究会	学籍番号	80228179	氏名	岡安尚昭
(論文題名)					
社内起業家の成功要因に関する一考察 — 技術者のキャリア発達の視点から —					
(内容の要旨)					
<p>日本製造業の国際競争力は、1990年代を通じて低下した。日本政府は、米国のようなベンチャー創出・育成のために、90年代半ばから数多くの抜本的なベンチャー施策を実施してきた。大手製造業でも新規事業の創出を目的に、社内ベンチャー支援制度によるスピノフを推進してきた。しかし、多数の新規事業が創出されてきているとは言い難い状況である。</p> <p>この問題の背景には、日本型経営の特徴とも言える雇用制度(終身雇用、年功序列、企業内教育による人材育成)が存在しているためと考えている。つまり、日本型経営の雇用制度が、終身雇用を前提とした制度であったため、個人がキャリア開発を考える必要はなく、大手製造業の研究開発技術者のキャリアは企業主導で実施されるケースが多かったからである。したがって、個人で積極的にキャリアを開発し続ける能力の重要性は認識されてこなかったのである。</p> <p>しかし、大手製造業では生き残りをかけた世界的な大競争の時代には、自らのキャリアを自ら積極的に開発していく人材が、技術イノベーションを起こし、新規事業を創出していくことが重要であるとの認識へと変化してきている。</p> <p>本研究では、大手企業の社内ベンチャー支援制度を利用して起業した研究開発技術者に焦点を絞り、各人のキャリア発達について事例調査を行い、新規事業を創出に導いた経験から成功要因について抽出することを試みている。社内起業家5人へのインタビューを通じ、「経験」や「転機」となった事項について語ってもらった。</p> <p>調査の結果、キャリア発達の初期段階において、「研究開発技術者の経験」、「経営者としての視点」をもつことが重要であることが判明した。キャリア中期において、「事業責任者としての視点」をもち、ビジネスを推進している。本研究では、「研究開発技術者の経験」、「経営者としての視点」、「事業責任者としての視点」を大きく「経験」として括った。また、キャリア移行期において、自律的なキャリアを構築するために、所属する組織の制度を「機会」として有効に活用していることが判明した。特に、キャリア移行期では、キャリアパスを見通したときに、組織に残留することの「キャリア不安」があり、キャリア移行期における「転機」が重要な意味をもつことが分析できた。以上のことから、「経験」×「転機」×「機会」が社内起業家への行動要因となっていることが判明した。</p>					